OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	社会観としての「高齢社会イメージ」とその特徴
Author(s)	岩渕, 亜希子; 直井, 優
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2003, 29, p. 68-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7507
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「大阪大学大学院人間科学研究科紀要」第29巻, 2003年 3 月所収

社会観としての「高齢社会イメージ」とその特徴

岩　渕　亜希子
直　井　　優

社会観としての「高齢社会イメージ」とその特徴

岩渕亜希子
直井　優

1．はじめに

1.1　目的

わが国はすでに、30年以上の永きにわたって、高齢化（aging）という社会変動の渦中にある。全人口に対する高齢者（65歳以上）人口の割合が７％を超えると「高齢化社会（高齢化しつつある社会 : aging　society）」、14％を超えると「高齢社会（既に高齢化が高水準に達した社会 : aged　society）」とされるが、わが国では高齢者人口割合７％を超えたのが1970（昭和45）年、この高度成長の終盤期以降、加速度的に高齢化が進み、いまから８年前の1995（平成７）年にはついに14％に達して「高齢社会」時代を迎えた（総務庁統計局 2000 : 21）。

高齢化に関連して生じた、あるいは生ずると予測された多くの変化は、これまでも多くの取組みをわたしたちに要請してきた。しかし、国立社会保障・人口問題研究所の将来人口推計（中位推計）によれば、現在およそ2,200万人である高齢者人口は、2013（平成25）年には3,000万人を突破し、2043（平成55）年には3,647万人でピークに達する（国立社会保障・人口問題研究所 2002 : 12）。つまり今後、いわゆる「団塊の世代（昭和22－24年出生世代）」が順次高齢期に入ることで、わが国の高齢化はさらに加速する。それに続いて「第二次ベビーブーム世代」が高齢期に参入することで、わが国の高齢者人口はピークを迎えるのである。ピークとなった後の2050（平成62）年には、高齢者人口割合は35.7％の水準に達するとされている（前掲書 : ３）。したがって、わが国は既に「高齢社会」時代を迎えたが、高齢化という社会動向は依然として続いているのであり、これまでと同様、わたしたちは今後も、さまざまの取組みを要請されることは確実といえる。

本稿は、この高齢化という社会変動が続く「高齢社会」に対して人々がどのような意識を抱いているか、すなわち「高齢社会イメージ」を分析の対象とする。「高齢社会イメージ」は、高齢者役割についての意識や、高齢化時代の社会的諸制度・価値観などについての意識からなる。Janice Sokoloff（1987）が、ある時代のある社会におけるエイジング観は、それぞれのライフ・コースを通じ、個別の主観的な経験と社会のより客観的な状況（階級やジェンダー）とがからみあって作り出されると指摘したように、高齢化

する社会についてのイメージも、年齢、性別、社会階層といった社会的諸属性によって異なると推察される。「高齢社会イメージ」と社会的諸属性の関連が重要であるのは、このような「高齢社会イメージ」が、中高年の自己イメージや高齢化に関連する変化への取組みに影響をもたらしうると考えるからである[1)]。

「高齢社会イメージ」の要素の１つである高齢者イメージ（老人観・老人イメージ）については、内外で多くの研究蓄積がある。しかし、古谷野亘ら（1997）が指摘するように、とりわけわが国では児童・学生を対象とした研究が多く（馬場純子ほか 1993；中谷陽明 1991；中野いく子 1991；保坂久美子・袖井孝子 1988など）、中高年の高齢者イメージについて扱ったものは少ない、したがって、成人を対象とした研究、年齢差ないし世代差を検討するための資料は著しく不足しているのが現状である（古谷野ほか 1997：148）[2)]。また、高齢社会を対象とした研究としては、高齢化社会についての知識を測定する質問群である、Palmore の The Facts on Aging Quiz やその改良版を用いた研究があるが（堀薫夫・大谷英子 1995；小田利勝 1992, 1994, 1995）、このクイズは高齢者や現在の社会状況、過去の高齢化の動向についての「知識」を問うものであって、現在も続いている高齢化に対する人々の意識をとらえるという視点には立っていない。また、高齢者イメージと高齢社会についての意識の関連の説明にも成功しているとはいえない。

このような問題意識のもと、本稿では、20歳から89歳までを対象とした大規模調査によって、高齢者イメージと高齢社会についての意識の双方を含む「高齢社会イメージ」を測定した結果を報告する。本稿の目的は、計量的手法を用いて「高齢社会イメージ」の様態を描き出し、さらに社会的諸属性との関連を明らかにすることで、今後より高度な分析を行なうための予備的分析を行なうことである。最終的には、高齢社会の主要トピックかつ政策課題の１つである、社会保障・社会福祉システムについての人々の態度や行動、中高年の自己イメージを説明する媒介変数として有効性のある、高齢社会イメージ質問項目群を作成することを目指している。予備的分析としての本稿では、「高齢社会イメージ」についての基礎的ではあるが、実証的な知見を提供していきたい。1.2節では、「続いている高齢化」を意識して行なわれた先行研究を概観し、２節以降の分析手順を示す。

1.2 先行研究

高齢化という社会システムレベルの変動に対して、人々がどのような意識を抱いているか、その内容については大きくマイナス・イメージとプラス・イメージに分けることができる。具体的には、一方で高齢期の生活保障や介護・看護、社会経済の停滞を憂える声があり、他方ではゆたかな福祉社会の成立、コミュニティ再生、高齢者の社会的活躍を期待する声がある。

マイナス・イメージについては、政府による世論調査の蓄積が大きい。たとえば、1998

（平成10）年度の国民生活選好度調査[3)]では、老後生活の不安について尋ねている。この調査では「自分の老後の生活に対して不安を感じることがありますか」という問いに、男女とも70%以上が不安を感じることがあると回答している[4)]。1986（昭和61）年に行なわれた老人福祉サービスに関する世論調査では、不安を感じると回答した人々の割合は男女ともおよそ50%であり、約15年の間に20%が上積みされた計算である。この「老後への不安感」の分布からは、年齢が上がるほど不安感が高いこと、中でも実際に老後を迎える60歳代の不安感が高いことが読み取れる。また老後生活のどのような点に不安を感じるかを尋ねた質問（複数回答）では、選択率の高い順に「経済（生活費等）に関する不安」（52.0%）、「健康に関する不安」（50.2%）、「介護に関する不安」（29.5%）となっており、いずれも1986年データと比較して回答率が各々20%程度ずつ増加している[5)]。

また1999（平成11）年度に行なわれた国民生活選好度調査[6)]では、「自分の老後に明るい見通しを持てない」との回答が８割を超え、過去最高であった[7)]。ただし「老後の見通し」の分布を年齢別にみると、高齢者ほど明るい見通しを持っており、明るい見通しを持っている人と明るい見通しでない人の割合の対比は、50歳代の15対85から、60歳代25対75、70歳代40対60へと大幅に接近している[8)]。さらに、生活のさまざまな側面について満たされているかどうかを尋ねた設問と「老後の見通し」との関連の分析からは、次のことが指摘されている。すなわち、老後に明るい見通しを持っていないと回答した人は、明るい見通しを持っている人に比べて、収入に関する項目で満たされていない人の割合が高い[9)]。

以上の概観から、マイナス・イメージの特徴について、いくつかの示唆を得ることができる。まとめると、(a)マイナス・イメージはかなり広範に共有されている。(b)マイナス・イメージと年齢との間には関連がみられるが、マイナス・イメージの項目内容によって年齢との関連が異なっている。(c)マイナス・イメージが強い人は収入への満たされなさが強いという正の関連が推察される。以上の３点である。

次に、高齢社会についてのプラス・イメージについての議論には、高齢化の進行が「福祉社会」や「ボランティア社会」といった、新しいゆたかな社会を構想する契機となるという議論（高橋勇悦・高萩盾男編 1996）、社会的弱者・社会問題としての高齢者像（高齢者役割）から、サクセスフル・エイジングやプロダクティブ・エイジングをキーワードとする自立的・生産的な高齢者像への転換という議論（安川悦子・竹島伸生編 2002）などがあり、これらの研究によってプラス・イメージの論点は提示されている。しかし、具体的な調査項目によって、人々のプラス・イメージに迫った調査研究はあまりみられない。

数少ない先行研究としては、高齢社会についてのプラス・イメージとマイナス・イメージの双方を含む質問項目群によって高齢社会イメージを問うた次の３つの調査、すなわち(1)大阪大学人間科学部経験社会学・社会調査法講座による1992年の「高齢化社会

と福祉に関する調査」（以下、福祉調査）（直井優・吉川徹編 1995）、⑵大阪大学大学院人間科学研究科社会環境学講座による1999年の「吹田市民のコミュニティ・ネットワークに関する調査」（以下、吹田調査）（川端亮・田中重人編 2001）、⑶青森県総合社会教育センターが2001年に行なった「高齢社会における高齢者教育に関する調査」（以下、青森調査）（青森県総合社会教育センター 2002）がある。本稿で用いる質問項目群は福祉調査・吹田調査の調査項目を参考に作成されたものである。具体的な項目や回答傾向については次節で触れることにして、ここでは青森調査の結果と、直接的な先行研究となる吹田調査の分析結果（伊藤まゆ・田中重人 2001）に限って検討を続ける。

青森調査では高齢社会イメージとしてプラス・イメージ５項目、マイナス・イメージ５項目の計10項目を用意し、回答者の気持ちに当てはまるものを複数回答で選ばせている。選択率の高い上位４項目は「親や配偶者の介護などの負担が増える」（57.5%）、「保険や年金など若者の負担が増える」（57.0%）などすべてマイナス・イメージであり、上述した国民生活選好度調査の結果と一致する。５位、６位に入ったプラス・イメージは「福祉が充実して誰でも安心して暮らせる」（30.4%）、「高齢者の活躍の場が多く、いきいきと暮らせる」（18.8%）であった。この４項目について年齢との関連をみると、マイナス・イメージは若い世代での選択率が高く、プラス・イメージでは高年代での選択率が高かったのである[10]。

吹田調査では、プラス・イメージ４項目、マイナス・イメージ３項目の計７項目を用意し、それぞれについて「そう思う」から「そう思わない」までの５択で回答を求めている。その分析内容をみていくと、第一に、肯定的回答の割合は一貫してマイナス・イメージの方が多い（本稿表１を参照）。第二に、この分析ではプラス項目群、マイナス項目群ごとに相関係数を示しており、プラス・イメージとマイナス・イメージとの関連は明らかでない。（ただし諸属性との相関係数をみると、ある属性変数がプラス・イメージと正の関連を持つとき、マイナス・イメージとの間では負の相関係数を示すという傾向は一貫している。）第三に、それぞれプラス・イメージ、マイナス・イメージごとに加算変数を作成し諸属性との相関をみているが、その結果によれば、女性の方がプラス・イメージが強く（−.094、５%水準で有意）、世帯年収が高いほどプラス・イメージが強く（−.156、同）、階層帰属意識が高いほどプラス・イメージが強い（.091、同）という関連があるが、年齢および教育年数とは有意な相関はみられない。また、マイナス・イメージは属性との相関がみられなかった。このことは、マイナス・イメージは属性のいかんにかかわらず高水準で共有されていること、つまり、「高齢社会イメージ」ではマイナス・イメージが主流であることを示唆している。

青森調査および吹田調査の結果から、「高齢社会イメージ」について、さらにいくつかの示唆を得ることができる。(d)プラス・イメージの項目よりも、マイナス・イメージの項目への選択率、もしくは肯定的回答の割合が高い。(e)ただし、マイナス・イメージとプラス・イメージの相関係数などは示されておらず、両者の関連性は明らかでない。

(f)項目別にパーセンテージの推移を検討したかぎりでは、マイナス・イメージ、プラス・イメージともに年齢との関連がみられるが、合成変数を用いた相関係数の検討ではいずれのイメージとも年齢との有意な相関がみられなかったこと、言い換えれば、複数のイメージ項目を合成することで関連性が相殺されてしまう可能性がある。そして(g)プラス・イメージは性別・階層帰属意識とごく弱い相関があり、また世帯年収とやや強い相関がある。以上の４点である。

(a)から(g)までの示唆から、第一に、(a)と(d)の内容からは、「高齢社会イメージ」の内容としては、マイナス・イメージの方が強い、つまりマイナス・イメージが主流である傾向がうかがわれる。この傾向は、多様なイメージ項目を用意した場合でも変わらないだろうか。第二に、(b)と(f)の内容からは、マイナス・プラスの各イメージともに、個別項目によって社会的属性変数との関連の仕方が異なる可能性があること、また合成変数として検討するとその内部で関連性が相殺されてしまう可能性があることがわかった。これを受けて、3.2節の相関分析、3.3節のクロス表分析では、「高齢社会イメージ」を個別項目のまま、社会的属性変数との関連性を検討していく。第三に、(c)と(g)の内容からは、収入の満たされなさとマイナス・イメージ、世帯年収および階層帰属意識の高さとプラス・イメージに正の相関がみられたことから、「高齢社会イメージ」の方向性には社会階層による散らばりがあることが考えられる。したがって、上記の相関分析・クロス表分析においては、この点に注目しながら分析を進めていきたい。最後に(e)から、マイナス・イメージの方が強いということ以外には、マイナス・イメージとプラス・イメージの関連性は明らかではない。この点については、3.2節での相関分析による概観と、3.3節でのクロス表分析の結果を総合的に検討したうえで、最後にまとめとして提示したい。

2．データの概要と「高齢社会イメージ」の質問項目群

2.1 データの概要

本稿で用いるデータは、2001年に実施された「情報化社会に関する全国調査」[11)]（以下、「情報化調査」）によって得られたものである。本調査は全国に居住する（ただし島嶼部を除く）20歳以上89歳以下の男女1,500人を対象として実施された。抽出方法は層化二段無作為抽出法、調査は委託会社の調査員による個別訪問面接調査であり、最終的な有効回答数（率）は1,011件（67.4%）であった。

2.2 「高齢社会イメージ」の質問項目群

「高齢社会イメージ」の基礎的分析のために用いるのは、「情報化調査」の面接票に含まれていた問13である。問13では「近年急速に高齢化が進んでいますが、そのことについてこの中のような意見があります。あなたはこれらの意見についてどう思いますか。」

表１　「高齢社会イメージ」項目の一覧

項目番号	「高齢社会イメージ」項目[1)]	各項目への肯定回答の割合(%)		
		福祉調査[2)] (1992年)	吹田調査[3)] (1999年)	情報化調査[3)] (2001年)
a	高齢者も住みやすい町づくりができる(＋)	56.9	－	48.0
b	高齢者とのふれあいが増える社会になる(＋)	－	－	56.9
c	高齢者が増えると、地域での暮らしが見直され、人々のつながりが強くなる(＋)	54.4	32.1	41.8
d	情報技術(IT)の進展によって、高齢者の社会参加が促される(＋)	－	－	35.4
e	介護を助ける仕組みが充実した社会になる(＋)	－	－	49.0
f	情報技術(IT)の進展によって、よりよい福祉サービスが可能になる(＋)	－	－	46.6
g	高齢者の経験や知恵が活かされ、社会的に活躍する高齢者が増える(＋)	67.6	54.0	51.3
h	高齢者向けの働き口が増える(＋)	51.4	34.4	25.0
i	生きがいを持った元気な高齢者が増える(＋)	73.2	61.6	56.9
j	政治における高齢者の発言力が増す(＋)	－	－	25.5
k	若い人が転出し、高齢者だけが取り残された町ができる(－)	68.4	69.2	56.5
l	情報技術(IT)の進展に、高齢者が取り残されてしまう(－)	－	－	65.2
m	活気ある経済社会が維持できない(－)	53.9	－	40.5
n	高齢者と若い層との意識の差が大きくなる(－)	71.6	62.6	62.0
o	社会に敬老の精神が失われる(－)	－	－	40.5
p	家族の介護負担がますます重くなる(－)	－	－	74.9
q	老後が不安な社会になる(－)	－	－	75.9
r	高齢者の弱みにつけこんだ犯罪が増える(－)	72.5	79.5	79.8

1）各項目末尾の(＋)はプラス・イメージ項目であることを、(－)はマイナス・イメージ項目であることを意味している。
2）福祉調査の選択肢は４択で設定されており、表中の数値(%)は「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合計した値である。
3）吹田調査および「情報化調査」の選択肢は５択で設定されており、表中には「そう思う」「ややそう思う」を合計した数値(%)を掲載した。「どちらともいえない」は含まれていない。

という質問文、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の５択の選択肢で、aからrまでの18項目の「高齢社会イメージ」について尋ねた[12)]。これらの18項目は表１に一覧で示した。各項目末尾に付した(＋)はその項目がプラス・イメージ項目であることを、(－)はマイナス・イメージ項目であることを意味している。したがってプラス・イメージ項目が10項目、マイナス・イメージ項目が８項目である。表の右には、前述した1992年福祉調査、1999年吹田調査、および2001年「情報化調査」それぞれの調査での各項目における肯定的回答の割合を掲載した[13)]。

1.2節で、「情報化調査」の質問項目群は福祉調査を参考に作成したと述べたが、表中で両調査に数値がそろっている９項目（a、c、g、h、i、k、m、n、r）が、福祉調査から得たものである（吹田調査の７項目も、福祉調査をもとに設定されている)。残りの９項目（b、d、e、f、ｊ、l、o、p、q）は、「情報化調査」で追加した項目である。

さて、経年変化を知るために、３つの調査時点での肯定的回答の割合を比較してみよ

う。ただし、福祉調査と「情報化調査」は全国調査であり吹田調査は大阪府吹田市のみで行なわれた調査である。また、福祉調査の選択肢は４択だが、吹田調査と「情報化調査」の選択肢は５択である。したがって単純な比較はできないし、安易に結論を求めることは避けなければならない。しかし、国民生活選好度調査で指摘された高齢社会に対する不安感の亢進がみられるのかどうか、その点に限って検討するのであれば、この比較も意味のあることだろう。

回答が５択である吹田調査・「情報化調査」については、表中には「どちらともいえない」を含まない合計値を掲載してあるため、４択である福祉調査と比較すると概して肯定的回答の割合は少なくなっている。ここでは、経年変化が一貫していて、肯定的回答の割合が大きく減少している項目にまず着目してみたい。

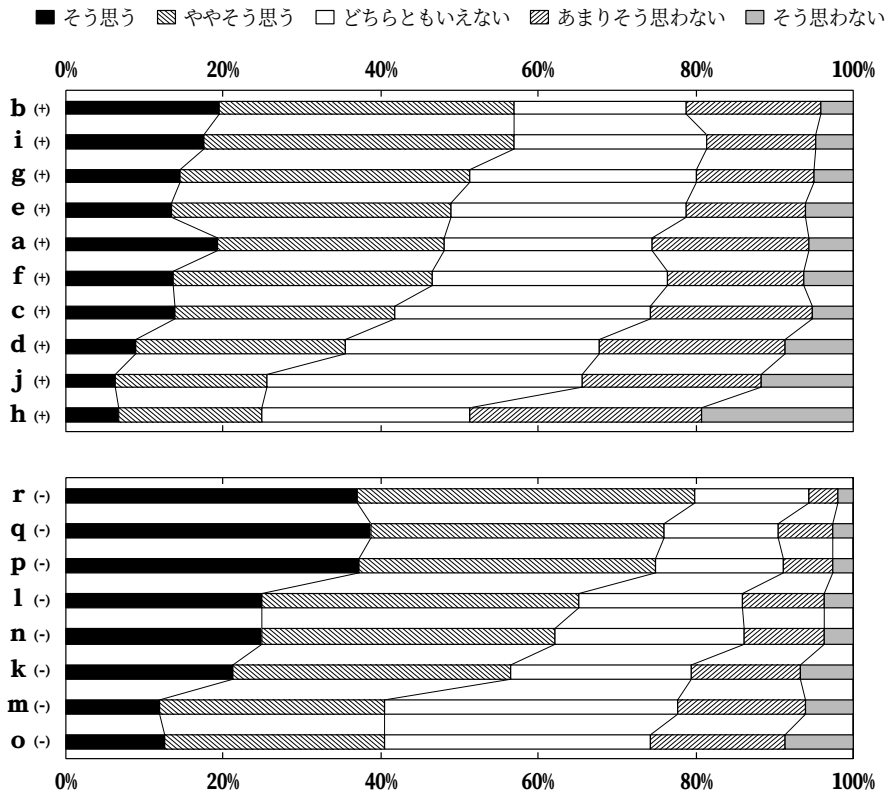
そのような条件に当てはまる項目は２つある。問13h と問13i である。ともに福祉調査から「情報化調査」まで一貫して減少しており、さらにその減少幅が20%を超えている。この２項目は、1.2節のレビューでいえば、「新しい高齢者像（高齢者役割）」に相当するプラス・イメージの項目である。「情報化調査」での値をみると、働き口に関しては、現在の不況も手伝ってか25.0%と非常に肯定的回答の割合が低くなっている。また生きがいを持った元気な高齢者の増加については、その肯定的回答の割合が減少してはいるものの、「どちらともいえない」を含めずになお56.9%と５割を超えており、問13gとともに、着目すべき点である。高齢期の生活保障に直結する高齢者雇用の問題についてのプラス・イメージは後退しているとみることができるが、高齢者の活動性・生産性を表わす問13g と問13i からは、「新しい高齢者像」のイメージが人々に定着しつつあることが感じられる。

他方で、問13r「高齢者の弱みにつけこんだ犯罪が増える」の経年変化も注目すべき点である。この項目の肯定的回答の割合は、わずかながら微増している。「どちらともいえない」を含めずに、およそ８割という高い割合を示していることを考えれば、事実上このマイナス・イメージが強まっていると解釈してよいだろう。新しい高齢者像の定着傾向と同時に、弱者としての高齢者という旧来の役割モデルも、依然として根強いということができる。

３．「高齢社会イメージ」の個別項目分析

3.1 「高齢社会イメージ」の回答傾向

2.2節では、「高齢社会イメージ」の経年変化について簡単にみてきたが、3.1節では本稿が分析対象とする「情報化調査」データに限って、回答傾向をよりくわしく検討する。問13、18項目の回答分布を図１にヨコ棒グラフで表わした。表１と同様、各項目末尾の(＋)と(－)は、それぞれプラス・イメージ項目、マイナス・イメージ項目であることを意味している。図１では、上にプラス・イメージ項目群、下にマイナス・イメージ



a. 高齢者も住みやすい町づくりができる(＋)
b. 高齢者とのふれあいが増える社会になる(＋)
c. 高齢者が増えると、地域での暮らしが見直され、人々のつながりが強くなる(＋)
d. 情報技術(IT)の進展によって、高齢者の社会参加が促される(＋)
e. 介護を助ける仕組みが充実した社会になる(＋)
f. 情報技術(IT)の進展によって、よりよい福祉サービスが可能になる(＋)
g. 高齢者の経験や知恵が活かされ、社会的に活躍する高齢者が増える(＋)
h. 高齢者向けの働き口が増える(＋)
i. 生きがいを持った元気な高齢者が増える(＋)
j. 政治における高齢者の発言力が増す(＋)
k. 若い人が転出し、高齢者だけが取り残された町ができる(－)
l. 情報技術(IT)の進展に、高齢者が取り残されてしまう(－)
m. 活気ある経済社会が維持できない(－)
n. 高齢者と若い層との意識の差が大きくなる(－)
o. 社会に敬老の精神が失われる(－)
p. 家族の介護負担がますます重くなる(－)
q. 老後が不安な社会になる(－)
r. 高齢者の弱みにつけこんだ犯罪が増える(－)

図１ 「高齢社会イメージ」の回答傾向（項目別）

項目群と分けてグラフ化し、さらにそれぞれの項目群の中で、肯定的回答(「そう思う」と「ややそう思う」の合計）が多い順に並べかえてある。項目番号に対応する項目内容の一覧はグラフの下に示した。

まず最初に、「答え方」という観点から「高齢社会イメージ」の回答傾向をみてみると、２つのことがいえる。第一に、プラス・イメージ、マイナス・イメージの全項目を通じて、もっとも多く選ばれている選択肢は「ややそう思う」という弱い肯定的回答である。第二に、肯定的回答の減少にともなって、「どちらともいえない」という中間回答が増加する一貫した傾向がある（ただし、問13h のみ例外的に「あまりそう思わない」が多くなっている）。

林知己夫（1988）は、在日米英人と日本人との「答え方」を比較して、「一概にいえない」「場合による」などの中間回答をいれた場合、日本人では過半数の人が中間回答を選びがちであることを見いだして、次のように述べている。「日本人は、中間的な回答をするのが好きなのでしょう」「日本人はバランス感覚が非常に鋭いのではないか……『直観的に』、総合的に、『それは時と場合による』と大きく把握していることが多いと思われます」（林 1988：196－203）。

林の分析したデータでは、選択肢が「賛成」「反対」「中間回答」の３択であるため、本稿のデータと単純な比較はできない。しかし、図１から判断して、問13p、q、r の「そう思う」が極めて多いことを除けば、「強い肯定的回答（そう思う）」と「強い否定的回答（そう思わない）」の割合は高いとはいえない。この意味では、「中間回答の多さ」という現象はここでも若干見いだされるものである。ただし、「どちらともいえない」というワーディングを用いている「中間回答」には、林が指摘した「時と場合による（A であるときもあれば、B であるときもある）」という解釈とは別に、「判断を保留する（A ともいえないし、B ともいえない）」という意見表明である可能性も残されている[14)]。このことは、分析結果の解釈において留意すべきであろう。

次に、全体としてマイナス・イメージへの肯定的回答がプラス・イメージに対するよりも多いという先行研究の知見について、項目数を18と増やした本稿においても傾向が変わらないかどうかについて確認しよう。「そう思う」だけの分布をみても、「そう思う」と「ややそう思う」の合計で分布をみても、全体としてはマイナス・イメージへの肯定的回答の方が多いことが図１を一見してわかる。マイナス・イメージを抱いている人の方が、プラス・イメージを抱いている人よりも多いということであり、先行研究の知見と一致する結果といってよい。

ただし、個別項目ごとにみていくと、若干異なる側面がみえてくる。マイナス・イメージ項目の中でも、問13m「活気ある経済社会が維持できない」と問13o「敬老の精神が失われる」についての肯定的回答は40％程度であり、プラス・イメージの多くの項目よりも肯定的回答の割合が少ない。逆に、問13p、q、r では、「そう思う」の回答も、「そう思う」「ややそう思う」の合計の割合も、際立って多いことがわかる。すなわち「介護負担」「老後不安」「高齢者への犯罪」という３つのマイナス・イメージは非常に強い。これらは広く共有されているマイナス・イメージの中でも、とりわけ多くの人々に持たれているイメージであるといえる。このように、マイナス・イメージにも内容によって

肯定的回答の割合に散らばりがあり、社会経済や価値観といった社会システムレベルの変動についてのイメージよりも、介護負担、老後不安、高齢者への犯罪といった「弱者としての高齢者」の存在を仮定するようなマイナス・イメージの方が強いといえる。

他方、プラス・イメージの項目で「そう思う」という強い肯定的回答が多いのは、問13a「住みやすい町づくり」、問13b「ふれあいが増える社会」の２項目である。問13e「介護を助ける仕組み充実」でも強い肯定的回答が多い。このことから、高齢社会のイメージとして、助け合いとあたたかな人間づきあいのある福祉が充実した社会というイメージが強いことがわかる。また、問13g「社会的に活躍する高齢者」や問13i「生きがいを持った高齢者」では強い肯定的回答の割合および合計の肯定的回答の割合も大きく、「新しい高齢者像」の定着傾向を感じさせる。この点は、表１の検討でも既に確認したところである。

以上では肯定的回答の割合に着目してきたが、ここで否定的回答（「あまりそう思わない」「そう思わない」の合計）の割合についてもみておこう。否定的回答の割合の多さで目立つのは、問13h と問13j、つまり雇用と政治についての項目である。特に雇用では、２割近くの人々が「そう思わない」と回答しており、この割合は際立って多い。これらの項目では中間回答（どちらともいえない）の割合も相対的に多く、その分肯定的回答が極端に少なくなっている。つまり、雇用、政治といった、社会システムのいわゆる公的な側面での変化については、プラス・イメージが弱い。またこのような側面について中間回答が多いのは、問13m「経済の活気を維持できない」における中間回答の多さも考え合わせると、ケース・バイ・ケースであるという意味での中間回答というよりは、判断が難しく回答を留保したと解釈するのが妥当ではないだろうか。「雇用が増える場合もあるし、増えない場合もある」「経済の活気が維持できることも、維持できないこともある」というよりは、「雇用が増えるかどうかわからない」「経済の活気が維持できるかどうかは判断しがたい」という方が自然であるように思う。

以上から、あたたかな福祉が充実した社会への変化は期待しているものの（問13a、b、c、e：40−50%）、雇用、政治、経済といった社会システムの公的な側面での変化には悲観的である（問13h、j、m：40−50%）。また、旧来の弱者としての高齢者役割にかかわるイメージが根強いが（問13p、q、r：70−80%）、その一方で新しい高齢者像の定着も進んでいる（問13g、i：50%）、という「高齢社会イメージ」を描くことができるだろう。高齢者像についてさらにいえば、旧来の高齢者像の１つである「余生を楽しむ」型の役割（＝労働市場外での活動）と、新しい高齢者像の１つである「生きがいを持って積極的に活動する」型の役割とが結びつく形で、高齢社会時代の高齢者像がイメージされていると解釈できる。

3.2 「高齢社会イメージ」の相関分析

項目間相関係数　次に、相関係数をみていこう。伊藤・田中（2001）では、プラス・イ

表２　「高齢社会イメージ」の項目間相関係数（ペアワイズ）

		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
	b	.66**	1.00															
	c	.54**	.61**	1.00														
	d	.36**	.35**	.39**	1.00													
	e	.50**	.50**	.47**	.43**	1.00												
＋	f	.40**	.37**	.43**	.48**	.66**	1.00											
	g	.40**	.41**	.42**	.41**	.45**	.49**	1.00										
	h	.34**	.32**	.30**	.35**	.38**	.35**	.50**	1.00									
	i	.36**	.45**	.42**	.34**	.44**	.39**	.56**	.46**	1.00								
	j	.30**	.30**	.31**	.35**	.35**	.27**	.38**	.46**	.47**	1.00							
	k	−.07	−.02	−.10*	−.04	.00	−.03	.03	−.08*	−.02	−.10**	1.00						
	l	.00	.05	−.01	−.05	.07*	.01	.03	−.11**	.03	−.06	.44**	1.00					
	m	−.07	−.05	−.05	−.03	−.06	−.05	−.05	−.11**	−.05	−.09*	.28**	.32**	1.00				
−	n	−.04	.03	−.07	−.09*	−.01	−.01	.03	−.14**	.01	−.13**	.42**	.42**	.43**	1.00			
	o	−.12**	−.13**	−.17**	−.06	−.11**	−.14**	−.06	−.12**	−.09*	−.13**	.33**	.29**	.38**	.49**	1.00		
	p	−.07	.05	.00	.00	.00	.01	.06	−.06	.05	−.07	.28**	.31**	.30**	.40**	.37**	1.00	
	q	−.09*	.00	−.04	−.03	−.05	.00	.04	−.09*	−.02	−.13**	.32**	.39**	.32**	.41**	.39**	.67**	1.00
	r	.03	.12**	.06	.03	.08*	.06	.14**	.00	.14**	.04	.31**	.38**	.22**	.37**	.32**	.50**	.51**

**p＜.01　*p＜.05

メージ項目群、マイナス・イメージ項目群ともに、それぞれ内部の諸項目間には強い相関関係のあることが示されていたが、プラス・イメージ項目とマイナス・イメージ項目の間の相関係数については言及されていなかった。

表２に「高齢社会イメージ」項目間の相関係数（ペアワイズ）を示した。いずれの項目も、肯定的回答ほど配点が高くなるように操作化してある。一見して、プラス・イメージ諸項目間（a から j）とマイナス・イメージ諸項目間（k から r）に、非常に強い相関係数のまとまりがあることが見てとれる。また、プラス・イメージ項目とマイナス・イメージ項目との間では、符号に着目すると、ほとんどの相関係数が負の符号を冠しており、妥当な結果となっている。ただし概して相関は弱く、0.1に満たないものが多い。他方のイメージに対して比較的強い相関関係にあるのは、プラス・イメージでは問13h、マイナス・イメージでは問13o である。この２つの項目と他方のイメージには、「プラス・イメージが強いほどマイナス・イメージは弱い」（あるいはその逆）という関連が成り立っているといえる。だがここでは、このような一次元的な関連性にある項目の方が少ない点により注目すべきであろう。プラス・イメージが強いほどマイナス・イメージは弱い（あるいはその逆）といった関連性は、全体としては読み取ることができない。

プラス・イメージ諸項目間の関連へ眼を向けると、a、b、c、e の間、g、h、i、j の間で、相関係数がのきなみ.45以上という強い関連のまとまりが見いだされる。前者のグループは「町づくり」「ふれあい」「地域の人のつながり」といったまとまりであり、後者のグループは「社会的に活躍」「働き口増加」「元気な高齢者」といったまとまりであ

る。他方、マイナス・イメージ諸項目間の関連では、pからrの3項目で相関係数.45以上という非常に強いまとまりが見いだされる。これらは「介護負担」「老後不安」「高齢者への犯罪」というまとまりである。いずれのまとまりにおいても、回答分布がやや類似している点は、3.1節で図1から確認した通りである。

社会的属性との相関　次の表3は、「高齢社会イメージ」の各項目と、社会的属性変数との相関係数（ペアワイズ）をみたものである。社会的属性変数としては、性別、年齢、教育年数、職業威信（SSM75年版）[15]、世帯年収、階層帰属意識を取り上げた。

個々の属性変数についてみていくと、まず性別は、吹田調査では「女性の方がプラス・イメージが強い」という有意な関連がみられたが、ここではいずれの項目とも有意な相関を持たなかった。また、ここでは男性に1点、女性に2点を与えたため、正の符号であれば少なくとも吹田調査の結果と関連の方向性が一致するのだが、プラス・イメージのうちでも問13g、13h、13jと性別との相関の符号は負を示し、吹田調査とは逆の結果であった。

次に年齢では、吹田調査では有意な関連が確認されなかったが、プラス・イメージで

表3　「高齢社会イメージ」項目と社会的属性の相関係数（ペアワイズ）

	項目[1]	性別[2]	年齢	教育年数	職業威信[3]	世帯収入	階層帰属意識[4]
＋	a	.016	−.012	.041	.031	.070+	.127**
	b	.001	.033	.006	.013	.044	.060+
	c	.021	.031	−.047	−.040	.021	.066+
	d	.049	−.043	.072*	−.001	−.007	.053
	e	.014	−.053	.046	.029	.046	.093**
	f	.039	−.087**	.048	.023	.065	.071*
	g	−.036	−.028	.037	−.015	.022	.052
	h	−.021	−.154**	.115**	.074+	.095*	.103**
	i	.017	.021	.014	.019	.016	.090**
	j	−.023	−.028	.032	.028	−.013	.086*
−	k	−.052	.038	−.008	−.008	−.042	−.027
	l	−.022	.044	−.031	−.015	−.065	−.025
	m	.004	.073*	.003	−.051	−.034	−.025
	n	.025	.146**	−.100**	−.047	−.011	−.030
	o	.027	.143**	−.080*	.014	−.050	−.050
	p	.030	.075*	−.044	−.083*	−.037	−.044
	q	.038	.009	−.060+	−.067+	−.049	−.073*
	r	.045	.048	−.058+	−.083*	−.025	−.031

**p＜.01, *p＜.05, +p＜.10

1）各項目は、「そう思う」ほど値が大きくなるように配点を与えている。
2）性別は、男性＝1、女性＝2を与えている。
3）職業威信は、SSM75年版で与えた。
4）階層帰属意識は、階層帰属意識が高いほど値が大きくなるように配点を与えている。

は問13f、13h との負の相関、マイナス・イメージでは問13m、13n、13o、13p との正の相関がここでは有意であった。すなわち、年齢が高いほど、情報技術による福祉サービスの向上(f)および高齢者向けの働き口の増加(h)に否定的である。また、年齢が高いほど、活気ある経済社会が維持できない(m)と思い、老若の意識格差が拡大する(n)・社会に敬老の精神が失われる(o)と考え、家族の介護負担がますます重くなる(p)と感じている。

表３をみると、有意な関連ではなかった変数でも、年齢とマイナス・イメージはすべて正の相関を示している。相関係数からのみ判断するならば、マイナス・イメージと年齢とは正の相関、つまり高齢者ほどマイナス・イメージを抱きやすいといえそうである。しかし、問13q「老後不安」項目との相関をみると.009と著しく小さな値になっている。これは、「高齢者ほど老後の見通しが明るい」という国民生活選好度調査の結果と考え合わせると、高齢者ほどマイナス・イメージを抱きやすいと結論するのは早計だろう。年齢と関連の深いマイナス・イメージを見極めていく必要がある。たとえば、国民生活選好度調査で、老後の不安感と関連が強いとされた項目に収入等が満たされているか否かというものがあった。年齢と有意に相関があった項目のうち、雇用(h)と経済社会(m)に関する項目はこれに類似する。また、マイナス・イメージの中で相関が.145前後で比較的高かった２項目は、老若の意識格差(n)と敬老精神(o)に関するもので、価値観の変化に対するイメージと考えることができる。老後の生活設計にかかわる実際的な側面である経済と介護、および価値観の変化に対して高齢者が敏感であるのかもしれない。

次に教育年数では、吹田調査では有意な関連が確認されなかったが、プラス・イメージでは問13d、13h との正の関連、マイナス・イメージでは問13n、13o、13q、13r との負の関連がここでは有意であった。すなわち、教育年数が長いほど、情報技術によって高齢者の社会参加が促され(d)、高齢者の雇用が促進される(h)と感じている。また、教育年数が短いほど、老若の意識格差が拡大(n)・敬老の精神が失われ(o)、高齢者の弱みにつけこんだ犯罪が増える(r)、老後が不安な社会になる(q)と感じている。

次に職業威信では、プラス・イメージでは問13h との正の相関が、マイナス・イメージでは問13p、13q、13r との負の相関がここでは有意であった。すなわち、職業威信が高いほど、高齢者向けの雇用が増える(h)と感じている。また職業威信が低いほど、家族の介護負担が重くなり(p)、高齢者の弱みにつけこむ犯罪が増え(r)、老後の不安な社会になる(q)と感じている。

次に世帯年収では、吹田調査では「世帯年収が高いほどプラス・イメージが強い」という関連がみられたが、ここではプラス・イメージのうちの問13a と問13h が有意な正の相関を持っているのみであった。すなわち、世帯年収が高いほど、高齢者も住みやすい町づくりが進み(a)、高齢者向けの雇用が増える(h)と感じている。世帯収入とマイナス・イメージとの間には、有意な関連は見いだされなかった。

最後に階層帰属意識では、吹田調査では「階層帰属意識が高いほどプラス・イメージ

が強い」という関連がみられたが、ここでも同様の関連が確認され、プラス・イメージのうち問13d と問13g を除くすべての項目と有意な正の相関を示した。マイナス・イメージでは有意な相関を持つものは少なく、問13q との間に有意な負の相関がみられた。すなわち、階層帰属意識が高い人ほど、住みよい町づくりが進んで(a)高齢者とのふれあいが増え(b)、地域での人々のつながりは強くなり(c)、介護を助ける仕組みが充実した社会になる(e)と感じている。さらにそのような人々は、高齢者向けの働き口は増え(h)、生きがいを持った元気な高齢者が増加し(i)、政治における高齢者の発言力も増すであろう(j)と考えてもいる。そして、階層帰属意識が低い人ほど、老後が不安な社会になる(q)と感じている。

こうして教育年数、職業威信、世帯年収、階層帰属意識と順にみてくると、いくつか気づく点がある。まず、プラス・イメージの中でも、問13h「高齢者向けの働き口は増加」は一貫して正の関連を持っている。教育年数が長いほど、職業威信が高いほど、世帯年収が高いほど、したがって客観的な社会階層が上位であるほど、さらには階層帰属意識が高いほど、高齢者向けの働き口の増加に肯定的である。ここで検討した６つの社会的属性変数のうち、５変数までと有意な関連を持っていたのは、唯一問13h のみである。

問13h 以外のプラス・イメージの各項目は、相関係数自体が非常に低く、また符号の向きも一様でなく、一貫した解釈がしにくくなっている。ただし１つ確実に指摘できることがあるとすれば、客観的な属性変数に比べて、階層帰属意識とは有意な相関が多くみられるという点である。これとはちょうど反対に、マイナス・イメージの各項目は、階層帰属意識との関連が弱い代わりに、客観的な属性変数との間に有意な関連が多くみられる。このことから、階層帰属意識は、「高齢社会イメージ」のプラス・イメージを判別する重要な基準となっており、この意味ではいわば主観的な属性といえるだろう。

マイナス・イメージの中では、問13n「老若の意識格差拡大」、問13o「敬老精神が失われる」の価値観２項目は共通して年齢および教育年数と有意な相関があった。年齢との相関係数の方が値が高いことを考えると、教育年数との負の相関は年齢による擬似相関である可能性が指摘できよう。また問13p「介護負担」、問13q「老後不安」、問13r「高齢者への犯罪」の３項目も、他の項目に比べて相対的に高い相関係数を示し、教育年数、職業威信の両変数に対して共通の相関傾向をみせている（問13p と教育年数の相関は有意ではないけれども)。また有意ではないが、世帯年収、階層帰属意識とも一貫して負の相関を示している。このことから、マイナス・イメージのうちでもこの３項目は、社会階層が低いほど、このマイナス・イメージが強いといって差し支えないであろう[16)]。

3.3 「高齢社会イメージ」のクロス表分析

ここにすべてのクロス集計表を掲載する紙幅はないため、いくつかの類似の分布傾向を確認して、それをよく表わしていると思われるクロス集計表を中心として取り上げて

いく。以下の本文で設問番号に付した、***はχ^2検定が0.1%有意水準で有意であったこと、**は同１％、*は同５％、+は同10%を意味するものとする。

性別　有意な関連はほとんどみられなかった。プラス・イメージで唯一問13i*、マイナス・イメージでも唯一問13p*との間に有意な関連性がみられたが、はっきりした傾向性を表わすものではなかった。有意ではなかったクロス集計表も検討したが、意味があると思われる関連性は発見できなかった。この結果は相関係数によるものと同様である。

年齢　ここでは年齢を、20−30歳代、40−50歳代、60歳以上の３グループに分けてクロス集計表を作成した。本稿のクロス集計表には、行パーセントと、行パーセントの下のカッコに調整済み残差[17]を掲載した（以下のクロス集計表もすべて同様）。年齢との関連では、多くのプラス・イメージに共通する特徴として、20−30歳代のカテゴリでは「ややそう思う」から「あまりそう思わない」までに分布する回答が多いことが指摘できる。ただしこの特徴は共有しながらも、若干の差異も認められる。その差異を示す代表的な２つのクロス集計表が、表４である。

その差異というのは、表４問13b に代表される関連性においては、60歳以上のカテゴリでは「どちらともいえない」の割合が非常に低く、かつ両端の２つのカテゴリ（「そう思う」と「そう思わない」）の割合が他の世代に比べて大きいという特徴がみられる。

表４　プラス・イメージ項目と年齢のクロス表（問13b と問13g）

年齢	問13b　高齢者とのふれあいが増える社会(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
60歳以上	22.9 (1.9)	36.9 (−0.3)	16.0 (−3.0)	17.6 (0.3)	6.5 (2.6)	100.0(306)
40−50歳代	22.3 (1.8)	35.8 (−0.9)	21.2 (−0.4)	17.5 (0.2)	3.2 (−1.1)	100.0(372)
20−30歳代	12.0 (−3.8)	40.4 (1.2)	28.8 (3.4)	16.1 (−0.6)	2.7 (−1.4)	100.0(292)
合計	19.4	37.5	21.9	17.1	4.1	100.0(970)

χ^2=30.688, d.f.=8, p<.001, Cramer'sV=.126

年齢	問13g　社会的に活躍する高齢者が増える(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
60歳以上	15.4 (0.6)	38.0 (0.5)	21.6 (−3.3)	17.4 (1.5)	7.5 (2.4)	100.0(305)
40−50歳代	13.9 (−0.4)	38.2 (0.7)	28.7 (−0.1)	14.2 (−0.5)	5.0 (0.0)	100.0(380)
20−30歳代	14.1 (−0.2)	33.8 (−1.3)	36.6 (3.5)	13.1 (−1.0)	2.4 (−2.4)	100.0(290)
合計	14.5	36.8	28.8	14.9	5.0	100.0(975)

χ^2=22.568, d.f.=8, p<.01, Cramer'sV=.108

これに対し、表４問13g に代表される関連性においては、60歳以上のカテゴリでは「ややそう思う」「あまりそう思わない」というあいまい回答が増加し、「そう思う」と回答する率が他世代と同程度になること。加えて20−30歳代のカテゴリでは、「どちらともいえない」への回答の集中がさらに進んでいることが特徴となる。

前者の、60歳以上の回答パターンに両極化がみられる関連のタイプは、問13b のほか、問13a+、13c*、13d+、13f*があり、また有意な関連ではなかったが問13e および13i でも同様の関連がみられた。後者の、60歳以上の強い肯定的回答が後退する関連のタイプは、問13g のほか問13h***、また有意な関連ではなかったが問13j でも同様の関連が確認できた。

次に、マイナス・イメージと年齢との関連では、関連性に２つの特徴がみられた。それぞれを代表するクロス集計表を表５に示した。１つめは、表５問13n にみられる「高齢者ほど、マイナス・イメージを肯定する割合が高い」という関連性であり、もう１つは表５問13p にみられる「どの年齢層においてもマイナス・イメージへの肯定的回答の率が非常に高いが、その中でもやはり高齢者ほどマイナス・イメージへの肯定的回答の割合が高い」という特徴である。前者の関連のタイプには他に、問13l**、13m***、13o***が分類でき、後者には問13r+のほか、有意な関連ではなかったが問13q でも同様の関連が確認できた。ただし、問13k のみは「そう思わない」「ややそう思う」の割合がどの

表５　マイナス・イメージ項目と年齢のクロス表（問13n と問13p）

年齢	問13n　高齢者と若い層との意識の差が拡大(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
60歳以上	36.0 (5.3)	33.7 (−1.5)	20.5 (−1.7)	5.7 (−3.1)	4.0 (0.5)	100.0(297)
40−50歳代	23.4 (−0.9)	39.6 (1.3)	20.7 (−2.0)	11.4 (1.0)	4.8 (1.5)	100.0(376)
20−30歳代	15.7 (−4.4)	37.2 (0.1)	32.1 (3.8)	13.3 (2.1)	1.7 (−2.1)	100.0(293)
合計	24.9	37.1	24.1	10.2	3.6	100.0(966)

χ^2＝51.314, d.f.＝8, p＜.001, Cramer'sV＝.163

年齢	問13p　家族の介護負担がますます重くなる(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
60歳以上	40.7 (1.5)	37.0 (−0.3)	14.8 (−0.9)	4.6 (−1.4)	3.0 (0.5)	100.0(305)
40−50歳代	40.5 (1.7)	37.3 (−0.2)	12.7 (−2.4)	6.6 (0.4)	2.9 (0.6)	100.0(378)
20−30歳代	29.6 (−3.3)	38.8 (0.5)	22.4 (3.4)	7.5 (1.1)	1.7 (−1.1)	100.0(294)
合計	37.3	37.7	16.3	6.2	2.6	100.0(977)

χ^2＝20.418, d.f.＝8, p＜.01, Cramer'sV＝.102

年齢集団でもほぼ等しく、それ以外の項目では高齢者ほど肯定的であるという、特異な度数分布を示した。

以上のマイナス・イメージについてのクロス集計表分析の結果は、相関分析の結果に沿うものである。つまり、マイナス・イメージのうち、正の相関が有意であった、問13m、13n、13o などは表５に示したように「高齢者ほど、マイナス・イメージを肯定する割合が高い」が、他の年齢層でも肯定的回答の割合が増加して差異が明確でなくなった問13p、13q、13r ではこのような関連は明確でなかった。この３項目の中では相関係数が.075で唯一有意であった問13p で、χ^2検定の結果も有意であった。また、相関係数がのきなみ有意な値ではなかったプラス・イメージでは、表４に示したように、年齢との関連性が線形関係ではないことが明らかになった。

学歴　ここでは学歴を、中卒および中卒相当学歴者（以下、中卒）、高卒および高卒相当学歴者（以下、高卒）、大卒および大卒相当学歴者（短大卒を含む。以下、大卒）の３グループに分けてクロス集計表を作成した。学歴と「高齢社会イメージ」との関連の特徴を一言でいうならば、次のようになる。すなわち、高学歴であるほど「どちらともいえない」という中間回答をする傾向にあり、高卒・大卒に比べると、中卒は「そう思う」「そう思わない」というはっきりとした回答を選択する傾向にある。この結果、肯

表６　「高齢社会イメージ」項目と学歴のクロス表(1)（問13h と問13n）

学歴	問13h　高齢者向けの働き口が増える(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
中　卒	9.1 (1.4)	13.4 (−2.0)	21.9 (−1.5)	25.7 (−1.3)	29.9 (4.3)	100.0(187)
高　卒	6.5 (−0.9)	17.4 (−0.1)	25.7 (−0.3)	31.8 (1.9)	18.6 (−1.2)	100.0(447)
大　卒	5.9 (−0.3)	23.0 (2.1)	29.8 (1.9)	28.9 (−1.1)	12.5 (−2.8)	100.0(305)
合計	6.8	18.4	26.3	29.6	18.8	100.0(939)

χ^2＝31.533, d.f.＝8, p＜.001, Cramer'sV＝.130

学歴	問13n　高齢者と若い層との意識の差が拡大(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
中　卒	36.4 (4.1)	27.3 (−3.1)	22.5 (−0.6)	7.0 (−1.7)	7.0 (2.7)	100.0(187)
高　卒	24.5 (−1.1)	38.4 (2.1)	24.3 (0.7)	9.1 (−1.9)	3.8 (−1.4)	100.0(453)
大　卒	17.9 (−2.7)	41.3 (0.5)	25.0 (−0.3)	14.1 (4.0)	1.6 (−0.9)	100.0(312)
合計	24.7	37.2	24.2	10.3	3.7	100.0(952)

χ^2＝39.188, d.f.＝8, p＜.001, Cramer'sV＝.143

定的な回答をする集団にも、否定的な回答をする集団にも、相対的に高い割合で中卒が含まれることになり、教育年数と「高齢社会イメージ」との関連は、単純な線形関係ではとらえがたくなる。

ただし、中卒の回答が他のカテゴリに比べ、両端（「そう思う」と「そう思わない」）で明らかに多いという場合と、その差が小さい場合とを区別することはできる。両端への回答の分散が大きい項目は、問13b+、13e**、13g***、13i**、13l*、13m***、13n***、13o**の８項目である。またその差が小さい項目は問13c*、13h***、13j**のほか、有意ではなかったが問13a が同様の分布傾向を示した。なお、問13d**、13f*、13k+の３項目は上記の特徴を共有せず、やや異なった分布を示していた。以上をふまえて、中卒の回答が両端で明らかに多い傾向を示す例として問13n（マイナス・イメージ項目）、その差が小さい例として問13h（プラス・イメージ項目）を選び、表６にそのクロス集計表を示した。

上述のように、学歴と「高齢社会イメージ」の関連性は単純な線形関係ではなかったが、代表的な関連を表わす例として選んだ問13h と問13n は、相関分析においては有意な相関係数を示していた。これは、問13h と問13n が、中卒での回答の両極化という点では傾向を共有しているが、プラス・イメージ項目である問13h では「そう思わない」の値が非常に大きく（調整済み残差4.3、５％水準で期待値よりも有意に大きい）、マイナス・イメージ項目である問13n では「そう思う」の値が非常に大きい（調整済み残差4.1、同じく５％有意）という特徴が、「学歴が低いほどプラス・イメージが弱い」「学歴が低いほどマイナス・イメージが強い」というそれぞれの相関関係につながったといえるだろう。

残りの３項目、問13p、13q、13r は回答分布そのものが肯定的回答に非常に偏っているため上述の傾向は持たないが、低学歴になるほど肯定的な回答をするという弱い関連性を共有している（10%水準）。この３変数を代表するクロス集計表として問13p を選び、表７とした。ここでも相関係数を確認すると、問13p は有意な相関ではないが、同様の関連性を示す問13q、13r においてはごく弱い有意な相関係数を示していることが

表７　「高齢社会イメージ」項目と学歴のクロス表(2)（問13p）

学歴	問13p　家族の介護負担がますます重くなる(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
中　卒	41.1 (1.3)	35.9 (-0.6)	14.6 (-0.8)	4.7 (-1.0)	3.6 (1.0)	100.0(192)
高　卒	39.5 (1.6)	33.6 (-2.9)	17.2 (1.3)	6.8 (0.6)	2.8 (0.0)	100.0(458)
大　卒	30.8 (-3.3)	44.9 (4.1)	16.3 (-0.8)	6.4 (0.3)	1.6 (-1.0)	100.0(312)
合計	37.0	37.7	16.4	6.2	2.6	100.0(962)

$\chi^2 = 15.029$, d.f. =8, $p < .10$, Cramer'sV = .088

わかる。

世帯年収　ここでは、世帯年収をサンプルがほぼ４等分になるようにグループ分けをし、350万円未満、350万円以上550万円未満、550万円以上850万円未満、850万円以上の４グループでクロス集計表を作成した[18)]。プラス・イメージでは、問13a+、13c*、13f**、13g*、13h*の５項目が、マイナス・イメージでは、問13o+のみが有意な関連を持っていたが、意味のある傾向を把握できるような関連性は見いだされなかった。ただし、学歴の場合に中卒で両端のカテゴリ（「そう思う」「そう思わない」）への回答の割合が、高卒・大卒に比べて多かったのと同様の傾向が若干みられた。すなわち、世帯収入においても、もっとも収入の低い350万円未満のカテゴリの回答分布が、両端のカテゴリで相対的に多くなる傾向がみられた（たとえば、問13g）。また、もう１つの傾向として、わずかではあるが、550万円以上850万円未満のカテゴリで、前後のカテゴリに比べて強い肯定的回答（「そう思う」）が多いという傾向がみられた（たとえば、問13f）。

問13g と問13f を、表８として示しておく。

表８　「高齢社会イメージ」項目と世帯収入のクロス表（問13f と問13g）

世帯収入	問13f　IT 進展でよりよい福祉サービスが可能に（%）					合計（人）
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
350万円未満	14.7 (0.5)	28.8 (−1.4)	23.9 (−1.1)	20.2 (0.5)	12.3 (2.9)	100.0(163)
350万円以上 550万円未満	12.9 (−0.3)	29.5 (−1.0)	35.6 (2.5)	17.4 (−0.5)	4.5 (−1.3)	100.0(132)
550万円以上 850万円未満	16.9 (1.4)	29.4 (−1.2)	28.8 (0.5)	16.9 (−0.7)	8.1 (0.5)	100.0(160)
850万円以上	9.9 (−1.6)	43.9 (3.5)	22.2 (−1.7)	20.5 (0.6)	3.5 (−2.2)	100.0(171)
合計	13.6	33.2	27.2	18.8	7.2	100.0(626)

$\chi^2 = 28.3828$, d.f. = 12, $p < .01$, Cramer'sV = .123

世帯収入	問13g　社会的に活躍する高齢者が増える（%）					合計（人）
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
350万円未満	19.7 (1.9)	29.5 (−2.4)	24.6 (−1.1)	16.4 (0.7)	9.8 (3.2)	100.0(183)
350万円以上 550万円未満	13.0 (−0.9)	41.3 (1.3)	28.3 (0.2)	14.5 (−0.1)	2.9 (−1.4)	100.0(138)
550万円以上 850万円未満	14.6 (−0.3)	34.1 (−0.8)	30.5 (0.9)	15.9 (0.4)	4.9 (−0.3)	100.0(164)
850万円以上	13.5 (−0.8)	43.3 (2.1)	28.1 (0.1)	12.3 (−1.1)	2.9 (−1.6)	100.0(171)
合計	15.4	36.7	27.7	14.8	5.3	100.0(656)

$\chi^2 = 21.540$, d.f. = 12, $p < .05$, Cramer'sV = .105

職業分類　ここでは、SSM の職業８分類にしたがって、専門・管理・事務・販売・熟練・半熟練・非熟練・農林の８カテゴリでクロス集計表を作成した。ここでは無職者・学生・その他は除いている。

まずプラス・イメージとの関連では、問13g*、13h***、13i+、13j*の４項目が有意な関連を示した。カテゴリ数が多いため解釈が難しいが、専門・管理・事務および販売で「ややそう思う」「どちらともいえない」が多く、熟練・半熟練・非熟練および農林では「あまりそう思わない」「そう思わない」が多いという傾向が読み取れた。この関連をもっともよく表わす例として、表９に問13h のクロス集計表を示す。その他のプラス・イメージでは、関連性は確認されなかったが、管理と非熟練・半熟練で「そう思う」が多いという傾向がみられた。

表９　プラス・イメージ項目と職業分類のクロス表（問13h）

職業分類	問13h　高齢者向けの働き口が増える（%）					合計（人）
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
専　門	11.3 (1.7)	17.5 (−0.8)	31.3 (1.0)	21.3 (−1.7)	18.8 (0.6)	100.0(80)
管　理	4.9 (−0.5)	17.1 (−0.6)	48.8 (3.4)	14.6 (−2.2)	14.6 (−0.3)	100.0(41)
事　務	4.7 (−1.2)	29.5 (3.0)	22.8 (−1.1)	32.2 (0.8)	10.7 (−0.2)	100.0(149)
販　売	6.0 (−0.3)	20.0 (−0.2)	34.0 (1.9)	23.0 (−1.6)	17.0 (0.2)	100.0(100)
熟　練	9.6 (1.2)	14.9 (−1.5)	19.1 (−1.7)	35.1 (1.3)	21.3 (1.4)	100.0(94)
半熟練	7.8 (0.4)	20.8 (0.0)	24.7 (−0.4)	24.7 (−1.0)	22.1 (1.4)	100.0(77)
非熟練	5.9 (−0.3)	15.7 (−0.9)	19.6 (−1.2)	43.1 (2.2)	15.7 (−0.2)	100.0(51)
農　林	2.5 (−1.1)	20.0 (−0.1)	17.5 (−1.3)	47.5 (2.6)	12.5 (−0.7)	100.0(40)
合計	6.8	20.7	26.4	29.6	16.5	100.0(632)

$\chi^2 = 52.230$, d.f. = 28, $p < .01$, Cramer'sV = .144

次に、マイナス・イメージでは、問13k*、13m+、13o+、13r**の４項目に有意な関連がみられたが、解釈可能な傾向性がみられたのは、問13k と問13r のみであった。この２項目は２つの共通する傾向を持っている。１つは、熟練・半熟練・非熟練・農林で「そう思う」が多く、専門・管理・事務・販売で「ややそう思う」が多いという傾向である。もう１つは、どういうわけか「管理」カテゴリでは「そう思う」との回答が、飛びぬけてというほどではないが、常に少ないという特徴である。この後者の特徴は、全体としては有意な関連性は読み取れなかった他の項目でも共有されている（たとえば、問13q、問13r）。これらの関連性をよく表わしている例として、表10に問13k のクロス集計表を

表10　マイナス・イメージ項目と職業分類のクロス表（問13k）

職業分類	問13k　若い人が転出し高齢者が取り残された町ができる(%)					合計(人)
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
専　門	17.5 (-0.9)	45.0 (1.9)	15.0 (-1.6)	13.8 (-0.4)	8.8 (1.0)	100.0(80)
管　理	11.9 (-1.5)	33.3 (-0.3)	40.5 (3.0)	11.9 (-0.6)	2.4 (-1.0)	100.0(42)
事　務	17.0 (-1.5)	38.6 (1.0)	24.8 (1.0)	13.7 (-0.6)	5.9 (-0.1)	100.0(153)
販　売	16.8 (-1.2)	40.6 (1.2)	18.8 (-0.8)	15.8 (0.2)	7.9 (0.8)	100.0(101)
熟　練	27.7 (1.6)	39.4 (0.9)	16.0 (-1.5)	11.7 (-1.0)	5.3 (-0.4)	100.0(94)
半熟練	30.7 (2.1)	17.3 (-3.5)	24.0 (0.5)	20.0 (1.2)	8.0 (0.7)	100.0(75)
非熟練	26.4 (0.9)	22.6 (-2.0)	28.3 (1.2)	18.9 (0.8)	3.8 (-0.7)	100.0(53)
農　林	28.2 (1.1)	33.3 (-0.3)	15.4 (-1.0)	20.5 (0.9)	2.6 (-1.0)	100.0(39)
合計	21.4	35.3	22.0	15.2	6.1	100.0(637)

$\chi^2 = 44.842$, d.f. $= 28$, $p < .05$, Cramer'sV $= .133$

示した。マイナス・イメージでは肯定的回答への偏りが大きいため、否定的回答における回答の散らばりが気なるが、「そう思う」「ややそう思う」の分布からは上述の２つの傾向が読み取れることがわかるだろう。

階層帰属意識　階層帰属意識は、「上」「中の上」「中の下」「下の上」「下の下」の５カテゴリで尋ねている。プラス・イメージと階層帰属意識には、非常に強い関連がみられた。プラス・イメージに関しては、その関連性として２種類あげることができる。第一の関連は、問13g*、13h**、13i*、13j*にみられたもので「階層帰属意識が高いほど、プラス・イメージを強く持っている」という関連性である。第二の関連は、「階層帰属意識が高いとあいまい回答や中間回答が多くなるが、階層帰属意識が低い人々はプラス・イメージに否定的である」という第一の関連性がやや崩れた形である。この関連は問13a***、13b**、13d***、13f*で確認された。問13c および13e では、有意ではなかったが第二の関連性に近い分布が確認できた。第一の関連性をよく表わす例として問13h を、第二の関連性をよく表わす例として問13a を、表11に示す。

次にマイナス・イメージと階層帰属意識には、プラス・イメージほど強い関連はみられず、有意な関連性を示したのは問13o**、13q***の２項目のみであった。有意ではなかった項目も含めて、マイナス・イメージと階層帰属意識の間の一貫している特徴は、「下の下」と回答したカテゴリで、「そう思う」という強い肯定的回答が他のカテゴリ

表11　プラス・イメージ項目と階層帰属意識のクロス表（問13a 問13g）

階層帰属意識	問13a　高齢者も住みやすい町づくり（%）					合計（人）
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
上	18.8 (-0.1)	25.0 (-0.4)	25.0 (-0.1)	12.5 (-0.8)	18.8 (2.1)	100.0(16)
中の上	19.3 (0.0)	37.0 (3.2)	28.3 (1.2)	12.6 (-3.5)	2.8 (-2.4)	100.0(254)
中の下	19.9 (0.4)	27.3 (-1.4)	24.4 (-0.8)	23.0 (2.3)	5.4 (-0.4)	100.0(443)
下の上	21.8 (0.8)	27.8 (-0.4)	21.8 (-1.1)	21.1 (0.4)	7.5 (1.0)	100.0(133)
下の下	7.1 (-2.1)	11.9 (-2.5)	33.3 (1.2)	31.0 (1.8)	16.7 (3.1)	100.0(42)
合計	19.4	29.4	25.6	19.9	5.7	100.0(888)

χ^2=46.964, d.f.=16, p<.001, Cramer'sV=.115

階層帰属意識	問13g　高齢者向けの働き口が増える（%）					合計（人）
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
上	18.8 (1.0)	25.0 (-0.6)	12.5 (0.6)	25.0 (-0.3)	18.8 (-1.0)	100.0(16)
中の上	4.7 (0.0)	24.5 (1.4)	27.3 (-1.3)	25.3 (0.5)	18.2 (-1.2)	100.0(253)
中の下	8.5 (0.6)	16.6 (-1.8)	25.8 (0.1)	32.5 (1.6)	16.6 (0.2)	100.0(434)
下の上	5.9 (-0.9)	18.5 (2.5)	27.4 (0.0)	29.6 (-2.6)	18.5 (0.0)	100.0(135)
下の下	4.5 (-0.7)	6.8 (-2.6)	13.6 (2.2)	31.8 (-0.2)	43.2 (2.6)	100.0(44)
合計	7.0	18.8	25.6	29.8	18.7	100.0(882)

χ^2=38.312, d.f.=16, p<.01, Cramer'sV=.104

表12　マイナス・イメージ項目と階層帰属意識のクロス表（問13o）

階層帰属意識	問13o　社会に敬老の精神が失われる（%）					合計（人）
	そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない	
上	23.5 (1.3)	17.6 (-0.9)	23.5 (-0.8)	23.5 (0.7)	11.8 (0.3)	100.0(17)
中の上	12.2 (-0.3)	25.1 (-1.1)	30.6 (-0.9)	25.1 (3.9)	7.1 (-1.5)	100.0(255)
中の下	11.4 (-1.2)	31.1 (2.2)	33.9 (0.6)	14.0 (-2.6)	9.6 (0.2)	100.0(437)
下の上	11.8 (-0.4)	23.5 (-1.2)	34.6 (0.5)	16.2 (-0.4)	14.0 (2.0)	100.0(136)
下の下	29.3 (3.2)	26.8 (-0.1)	34.1 (0.2)	4.9 (-2.1)	4.9 (-1.0)	100.0(41)
合計	12.8	27.8	32.8	17.3	9.4	100.0(886)

χ^2=37.642, d.f.=16, p<.01, Cramer'sV=.103

のそれよりも多いという一点に尽きる。また多くみられる傾向として、「上」カテゴリの「そう思う」も多いのだが、このカテゴリの度数が非常に少ないので、誤差の範囲である可能性が高い。したがって、ここでは「下の下」で際立って「そう思う」が多いということを指摘するのにとどめるのが賢明であろう。表12には、この分布の例として問13o を示した。

以上、「高齢社会イメージ」と社会的属性変数との関連をクロス集計表およびχ^2検定を用いてみてきた。1.2節で指摘したように、「高齢社会イメージ」に社会階層による散らばりはあるのか、という観点から結果を整理してみる。

まず、プラス・イメージと社会的属性変数の関連はどうであったろうか。年齢との関連では、60歳以上のカテゴリで「そう思う」「そうは思わない」への回答割合が相対的に高いという特徴がみられた。これはたとえば、青森調査における「高齢者ほどプラス・イメージが高い」という結果と矛盾するだろうか。実際には矛盾するとはいえない。なぜならば、青森調査における回答は複数回答の選択式であり、いわば「そう思う」だけの集計表だからである。本稿のデータでも「そう思う」だけに着目すれば同様の傾向を読み取ることができる。したがって年齢とプラス・イメージとの関連では、全体としてみるならば高齢であるほどプラス・イメージが強いとはいえない。

学歴、世帯年収、職業分類および階層帰属意識とプラス・イメージとの関連はどうであったろうか。学歴ではプラス・イメージ固有と判断できるような関連性は見いだされなかったが、中卒で「そう思う」「そう思わない」の割合が多く、高卒・大卒では「ややそう思う」「どちらともいえない」の割合が多いという関連がみられた。世帯収入では、学歴と同様の傾向が若干ながらみられた。職業分類では、専門・管理・事務・販売の各カテゴリで、熟練・半熟練・非熟練・農林よりもプラス・イメージが強いという関連がみられた。階層帰属意識では、少なくとも階層帰属意識の低い人々はプラス・イメージが弱いということは確認できた。

この結果から、少なくとも、社会階層において下位にある人々は、高齢社会についてのプラス・イメージを抱きにくいのではないか、ということがいえる。中卒および350万円未満のカテゴリにおける回答傾向が、他の層に比べて「そう思う」「そう思わない」へ分散した理由として、「学歴は低いが階層は高い人々（たとえば一部の高齢者）」「世帯収入は低いが実質生活における階層はそれほど低くはない人々（たとえば一部の学生）」などが混在していることが考えられる。60歳以上のカテゴリで回答が分散したことが前者の学歴についての推察を、有職者のみを対象に分析をした職業分類ではこのような分散がみられなかったことが後者の世帯収入についての推察を支持するように思われる。

次に、マイナス・イメージと社会的属性変数との関連をみてみよう。年齢との関連では、高齢であるほどマイナス・イメージが強いという関連性がみられた。学歴、世帯年

収、職業分類および階層帰属意識との関連では、まず学歴との間に「そう思う」「そう思わない」の割合は中卒で多いが、「ややそう思う」「どちらともいえない」の割合は高卒・大卒で多いというプラス・イメージのときと同様の関連がみられた。ただし、中卒の回答傾向として、プラス・イメージにおいては「そう思わない」がマジョリティであったのに対し、マイナス・イメージにおいては「そう思う」がマジョリティとなっている点が重要な差異である。世帯収入との間でも、有意ではなかったが同様の傾向がみられた。職業分類では、熟練・半熟練・非熟練・農林に「そう思う」が多く、専門・管理・事務・販売に比べてマイナス・イメージが若干強いことが確認できた。階層帰属意識との関連では、プラス・イメージの時ほど明瞭な関連性はみられなかったが、少なくとも階層帰属意識が低い人々でマイナス・イメージが強い、ということは確認できた。

この結果から、少なくとも、社会階層において下位にある人々は、高齢社会についてのマイナス・イメージを抱きやすいのではないか、ということがいえる。つまり、社会階層において下位にある人々は、プラスの「高齢社会イメージ」を抱きにくく、マイナスの「高齢社会イメージ」を抱きやすい可能性が高いのである。

４．まとめと今後の課題

本稿では、回答分布の検討、相関分析、クロス集計表分析という基本的な分析手法を用いて、「高齢社会イメージ」の回答傾向および社会的属性との関連について分析を行なった。４節では、この手続きによって得られた知見を確認しながら、1.2節で指摘したように、高齢社会についてのプラス・イメージとマイナス・イメージの関連について若干の考察を加えたい。

肯定的回答の経年変化と回答分布の検討からは、全体としてマイナス・イメージを抱いている人の方が、プラス・イメージを抱いている人よりも多いことがわかった。また、具体的なイメージの内容として、あたたかなふれあいのある福祉の充実した社会への変化は期待しているものの、雇用、政治、経済といった社会システムの公的な側面での変化には悲観的であり、旧来の弱者としての高齢者役割にかかわるイメージは根強いが、その一方で新しい高齢者像の定着も進んでいる、という高齢社会像を描くことができた。ただし、「新しい高齢者」の活躍の場としては労働市場ではなく、むしろ旧来の高齢者像の１つである「余生を楽しむ」型の役割（＝労働市場外での活動）による活動的な高齢者像が想定されているといえた。

相関分析からは、特定の項目を除いて、プラス・イメージが強いほどマイナス・イメージは弱い（あるいはその逆）といった一次元的な関連性は、全体としては確認できなかった。この理由は本稿の分析からは明らかにできないが、可能性として次のことが指摘できるだろう。相関分析の結果によれば、マイナス・イメージは主に客観的な属性変数との間に有意な関連性がみられたが、プラス・イメージは客観的な属性変数との関連は弱

く、主観的な変数である階層帰属意識との関連が強かった。このことは、プラス・イメージとマイナス・イメージの形成要因ないしは形成過程がやや異なるのではないかという推測を生む。それぞれのイメージはその形成において独立である可能性が示唆されるのである。

次に、社会階層と「高齢社会イメージ」の関連という視点から、相関分析の結果とあわせて、クロス集計表を確認した。その結果、社会階層と「高齢社会イメージ」の間に明らかな線形の関連は確認できなかったが、少なくとも社会階層の下位にある人々にとっては、プラス・イメージは抱きにくく、マイナス・イメージは抱きやすいのではないかということが明らかになった。ただし、本稿のデータは20歳以上89歳未満という非常に幅広い年齢層を対象としていたが、このようなデータによって分析する際には、「学歴が低く、現在は職にも就いていないが、世帯収入は高い高齢者」や「学歴が高く、階層帰属意識も高いが、世帯収入は低い学生」といったサンプルの中の多様性について注意を向ける必要があることも示唆された。

クロス集計表による分析では、類似の分布傾向を持つものを把握し、その分布傾向をよく表わすクロス集計表を実際に示すという方法を採った。この過程では、しばしば同じ項目群の類似が確認できた。その最たるものは、問13p、13q、13r の３項目であろう。この３項目は、回答分布、相関係数においても類似性を示しており、高齢社会に対するマイナス・イメージの類似した側面を表わしていると考えられる。この３項目ほど一貫性はないものの、このようなまとまりは、クロス集計表分析における問13g、13h、13i、13j の４項目にもみられた。これら４項目は、高齢社会に対するプラス・イメージのうち、新しい高齢者像にかかわっている。しかし、この４項目の中でも支持の高い問13g、13i と支持の低い問13h、13j との間には、回答分布などに歴然とした差異があり、この点がまとまりの一貫性の低さにつながっているだろう。

以上、本稿で得られた知見を確認し、さらに若干の考察を加えてきたが、ここで指摘した「プラス・イメージとマイナス・イメージの形成要因ないし形成過程における違い」および「高齢社会イメージ内部における項目間の類似性と差異によるまとまり」について、より高度な分析をすることを、今後の課題としたい。

付記

本研究は平成13年度科学研究費基盤研究 A(2)13301007「情報通信技術(IT) 革命の文化的・社会的・心理的効果に関する調査研究」（研究代表者 : 直井優）の研究成果の一部である。

注

1）「高齢社会イメージ」の一要素である高齢者イメージ（老人観・老人イメージ）については、たとえば、馬場純子らは「現在の児童が高齢者をどのように見ているかということは、将来の高齢社会のありかたや児童自身の人生観に大きく影響すると考えられる」（馬場ほか 1993：3）と指摘し、中学生を対象とした老人観の測定・分析を行なった。また古谷野亘らは「人々の老人観は、その社会で老人がおかれている状況を反映すると同時にそれを規定し、さらに老人自身の自己概念や適応にも大きな影響を及ぼす」（古谷野ほか 1997：147）と指摘し、中高年を対象とした老人イメージを測定・分析している。

2）中高年の老人イメージそのものを取り上げた研究として、前出の古谷野ほか（1997）、辻正二（2000）があげられるほか、世代間比較の視角をもつ研究としては、「老いや死への意識」を対象に高齢者と大学生を比較した堀薫夫（1996, 1998）が貴重である。

3）全国の20歳以上69歳以下の男女、5,000人を対象とした個別訪問留置き調査で、サンプル抽出は層化二段無作為抽出法による。有効回収数（率）3,826人（76.5%）（経済企画庁国民生活局編 1999：1－2）。

4）第2－1図「老後への不安―男女年齢を問わず高まっている」より（経済企画庁国民生活局編 1999：16）。ただし、回答は「不安を感じることがある」「不安を感じることがない」の2択。また、1986年データについても同図から得た。

5）第2－2図「老後の不安に思っていることで、特に『経済（生活費等）に関する不安』『介護に関する不安』が増加している」より（経済企画庁国民生活局編 1999：17）。また、1986年データについても同図から得た。

6）全国の15歳以上75歳未満の男女、5,500人を対象とした個別訪問留置き調査で、サンプル抽出は層化二段無作為抽出法による。有効回収数（率）4,179人（76.0%）（経済企画庁国民生活局編 2000：1－2）。

7）第1－17図「低下している老後の明るい見通し」より（経済企画庁国民生活局編 2000：31）。

8）第1－18図「高齢者ほど明るい老後の見通し」より（経済企画庁国民生活局編 2000：32）、ただし、明るい見通しと回答した者の率が底を打っているのは30歳代（5－10%程度）であり、10歳代、20歳代では若干高く10－20%程度である。また、回答の選択肢は「全く明るい」「どちらかといえば明るい」「どちらかといえば明るい見通しでない」「全く明るい見通しでない」の4択で、割合の対比は前後2項目ずつを合算した値である。

9）第1－19図「自分の老後に明るい見通しを持てない人はとりわけ収入に関する項目で満たされていない」（経済企画庁国民生活局編 2000：33）、「持とうと努力すれば自分の家が持てること」「安心して子どもを生み育てられる環境が整っていること」などの項目で「満たされていない」と回答した人の割合は、明るい見通しである人で約15%、明るい見通しでない人で約30%であったが、「目標を満たすのに充分な貯蓄ができること」「老後に充分な年金が得られること」などでは、明るい見通しである人が約40%であるのに対し、明るい見通しでない人では約70%ときわめて高率であった。

10）ただし、回答の分布傾向からみた結果であり、統計的な検定を行なっているわけではない（青森県総合社会教育センター 2002：11）。

11）「情報化社会に関する全国調査」（Japan survey on Information Society：JIS）は継続調査として計画されており、すでに第2回調査（2002年）が実施された。今後は国際比較調査も実施される予定である。2001年調査の詳細は、直井優・菅野剛（2003）を参照されたい。

12）本来問13は問13s，問13tを含む20項目からなるが、問13sと問13tは「若さという価値」についての項目であるため、ここでは分析に含めない。

13）本文中でも触れているが、次の点に注意されたい。福祉調査では、選択肢を「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」の４択で設定しており、表中の数値は前二者の合計である。これに対し、吹田調査、「情報化調査」の選択肢は「どちらともいえない」を含む５択であった。このため、表中の数値は「そう思う」「ややそう思う」の合計としてあり、「どちらともいえない」を除いた値となっている。

14）たとえば轟亮（2001）は、高校３年生の職業観の世代間比較分析において、「どちらともいえない」という中間回答の増加が５つの職業観項目に共通する傾向であることを見いだし、これを次のように解釈した。「高校生は見通しにくい将来を前にして、従来の職業意識、戦後日本の産業社会の職業規範に追従することがかなわず、かといって否定し捨て去ることもできないというジレンマ状況にある。そのため彼／彼女らは、とりあえず望ましさについては『判断保留』し、目前にある短期的な欲求を充足していくことで対応している。」（轟 2001：144、下線引用者）

15）職業威信スコアとは、「人々の職業にたいする社会的評価の一側面」（直井優・鈴木達三 1977：117）として職業威信評定法によって測定・算出された、「職業の社会的役割と社会的地位の二つの異なった次元を総合した評定」（同：140）である。またこのスコアは、職業階層の不平等度の比較・分析を可能にする、妥当性と信頼性を持った代表的尺度であるとされている（直井 1979：471）。本稿では、1975年 SSM 調査の際に調査・評定された SSM 職業威信スコアを用いている。

16）この p、q、r の３項目は、回答分布と項目間相関でもよい類似性、よいまとまりをみせていたグループであったことは、ここでもう一度指摘しておいてよいだろう。

17）調整済み残差（調整残差）は、「各セルの実現度数と期待度数の差（残差）を分散によって調整したもので、実現度数が期待度数に等しいという帰無仮説のもとで、平均０、分散１の標準正規分布に従う。従って、調整残差が標準正規分布の５パーセント点である1.96より大きければ、そのセルの実現度数は、期待度数よりも（５パーセント水準で）有意に大きく、逆に−1.96よりも小さければ有意に小さいと考えることができる。」（佐藤裕 1995：78−9）

18）世帯収入については、同じようにサンプルが５等分になるようなカテゴリ区分（250万円未満、250万円以上450万円未満、450万円以上650万円未満、650万円以上1000万円未満、1000万円以上）でも同様の分析を行なったが、結果はほとんど変わらなかった。

引用文献

青森県総合社会教育センター，2002,『現代的課題の学習に関する調査研究　高齢社会における高齢者教育に関する調査報告書』.

馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明，1993,「中学生の老人観−−老人観スケールによる測定」『社会老年学』38：3−12.

林知己夫，1988,『日本人の心をはかる』朝日新聞社.

堀薫夫，1996,「大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較」『大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門』44(2)：185−97.

−−−−，1998,「中高年層の老いと死への意識の構造」『大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門』47(1)：153−64.

堀薫夫・大谷英子，1995,「高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究−−The Facts on Aging Quiz を用いて」『大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門』44(1)：1−12.

保坂久美子・袖井孝子，1988,「大学生の老人イメージ−−SD 法による分析」『社会老年学』27：22−33.

伊藤まゆ・田中重人，2001,「意識の中の高齢社会」川端亮・田中重人編『吹田市民のコミュニティ・ネッ

トワークに関する調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科　社会環境学講座　先進経験社会学研究分野 : 124−32.
川端亮・田中重人編，2001,『吹田市民のコミュニティ・ネットワークに関する調査報告書』大阪大学大学院人間科学研究科 社会環境学講座 先進経験社会学研究分野.
経済企画庁国民生活局編，1999,『平成10年度国民生活選好度調査　生活のなかのゆとりと安心−−老後、住宅、子ども』大蔵省印刷局.
−−−−, 2000,『国民の意識とニーズ 平成11年度国民生活選好度調査』大蔵省印刷局.
国立社会保障・人口問題研究所，2002,『日本の将来推計人口（平成14年１月推計）平成13(2001)年〜平成62(2050)年』厚生統計協会.
古谷野亘・児玉好信・安藤孝敏・浅川達人，1997,「中高年の老人イメージ−−SD 法による測定」『老年社会科学』18(2) : 147−52.
中野いく子，1991,「児童の老人イメージ−−SD 法による測定と要因分析」『社会老年学』34 : 23−36.
中谷陽明，1991,「児童の老人観−−老人観スケールによる測定と要因分析」『社会老年学』34 : 13−22.
直井優，1979,「職業的地位尺度の構成」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会 : 434−72.
直井優・吉川徹編，1995,『経験社会学・社会調査法叢書Ⅳ 家族と高齢化社会−−学術用モニター・システムの開発』大阪大学人間科学部 経験社会学・社会調査法講座.
直井優・菅野剛，2003（近刊),「『情報化社会に関する全国調査』(JIS2001）の概要」『大阪大学人間科学部紀要』29.
直井優・鈴木達三，1977,「職業の社会的評価の分析−−職業威信スコアの検討」『現代社会学』4 (2) : 115−56.
小田利勝，1992,「高齢化問題に関する事実認識と高齢に対する態度−−高齢化社会クイズ作成の試みと解答の分析」『徳島大学社会科学研究』6 : 141−70.
−−−−，1994,「高齢化社会に関する人々の事実認識−−『高齢化社会クイズ』第３版の分析」『徳島大学社会科学研究』7 : 237−62.
−−−−，1995,「『高齢化社会クイズ』の目的と性格−−古典的テスト理論における妥当性と信頼性をめぐって」『徳島大学社会科学研究』7 : 205−33.
佐藤裕，1995,「クロス表とログリニアモデル」『理論と方法』10(1) : 77−90.
Sokoloff, Janice, 1987, *The Margin That Remains : A Study of Aging in Literature*, New York : Peter Lang.
総務庁統計局編，2000,『平成７年国勢調査編集・解説シリーズ№９　高齢人口と高齢者のいる世帯』日本統計協会.
高橋勇悦・高萩盾男編，1996,『高齢化とボランティア社会』弘文堂.
轟亮，2001,「職業観と学校生活感−−若者の『まじめ』は崩壊したか」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学−−進路・生活・世代』ミネルヴァ書房 : 129−58.
辻正二，2000,『高齢者ラベリングの社会学−−老人差別の調査研究』恒星社厚生閣.
安川悦子・竹島伸生編著，2002,『「高齢者神話」の打破−−現代エイジング研究の射程』御茶の水書房.

Aged Society Images as a Perspective on Our Society and Some Characteristics of those Images

Akiko IWABUCHI and Atsushi NAOI

Japan has been an aged society since 1995 and the aging process is continuing. This article analyzes how people think about "aged society images." Aged society images are composed of notions and beliefs about the roles of the elderly, and institutions and values in an aged society. It is supposed that social attributes such as age, gender and social class, affect what image people have about their society. We believe that the relationship between aged society images and social attributes is important because these images will influence many things. For example, social policies for dealing with aging, people's financial plans for their lives, intergenerational care relationships, and the self-images and psychological well-being of the middle-aged and elderly.

We use data from the Japan Survey on Information Society (JIS), which had 1500 respondents ranging in age from 20 to 89 years (response rate : 67.4%). Using the data, this paper describes some aspects of aged society images. It identifies the casual factors of these images through an analysis of the relationship between the images and social attributes. This study is only a preliminary step toward more advanced analysis, so its purpose is to supply basic empirical information about aged society images.

Some studies have already shown that aged society images have positive and negative dimensions. Our questionnaire about aged society images has 18 items. Among these items, 10 items are about positive images and 8 items are about negative images. Subjects' responses ranged from "agree" to "disagree" on a 5-step Likert scale.

The results are as follows. First, the majority of aged society images are negative. While people optimistically imagine that (1) aged society will have humanistic relationships in communities and good welfare systems, (2) they are pessimistic about employment, politics and the economy. (3) The customary images of the elderly as weak remained unchanged, (4) but new images of the elderly as active and productive are becoming more common. Second, positive images don't necessarily mean that subjects don't also hold negative images. Therefore it is not appropriate to say that when one has strong positive images he/she doesn't have negative images. Positive images are strongly correlated with the subjective variable, stratum identification. On the other hand, negative images strongly correlate with the objective variables, age, educational background, occupational prestige, and family income, but only weakly correlate with stratum identification. The result of this correlation analysis suggests that positive images and

negative images have several different casual factors and compositional processes. Finally, to understand how social attributes affect one’s aged society images, the cross−tabulation tables are examined. The results reveal that those who are located lower in the social stratum objectively and have lower stratum identification often hold negative images and find it difficult to hold positive images.